

# 磨製石斧の生産と流通及び、円筒土器文化の地域性に関する考察



三内丸山遺跡センター 高橋 哲

はじめに

三内丸山遺跡は、青森県青森市中心部から南西方向、陸奥湾より内陸に5kmほど、沖館川の右岸段丘上に位置する遺跡である。世界文化遺産候補の構成資産の一つであり、縄文時代前期中葉から中期後葉、紀元前3900年から紀元前2200年まで、約1700年間営まれた遺跡である。

江戸時代に三河国（現愛知県）出身の菅江真澄が三内丸山遺跡近隣を訪れた記録がある。昭和28年から小規模な発掘調査が行われたが、この遺跡が広く注目を浴びるきっかけは、平成4年から行われた野球場建設に伴い実施された緊急調査である。この調査によって大規模なムラの様子（写真1）、膨大な遺物、当時の

食料や有機質遺物、交易活動がわかる多くの資料が得られた。

このように、遺跡の規模が大きく、存続期間も長く、縄文文化の実態を総合的に解明する上で、きわめて高い学術的価値をもつと評価を受け、平成6年に保存が決定され、平成9年に国の史跡、平成12年には特別史跡に指定された。

保存が決定された後、平成7年から、縄文のムラのたたずまいを体感できる場所として、竪穴建物、掘立柱建物などの立体表示が整備された（写真2）。さらに縄文文化の情報発信として縄文時遊館、平成22年にさんまるミュージアムを縄文時遊館内に開館、平成30年には重要文化財が保存活用できるように新展示収蔵施設が竣工された。

さんまるミュージアムの中に「広域のネットワーク」として、遠方から持ち込まれた遺物が展示されている（写真3）。新潟県産ヒスイの玉、北海道・長野県産黒曜石のような、北は北海道から南は長野県まで、広範囲の地域からモノが三内丸山遺跡に持ち込まれたことが明らかと



写真1 発掘調査風景



写真2 史跡整備後



写真3 さんまるミュージアム展示の様子



写真4 磨製石斧

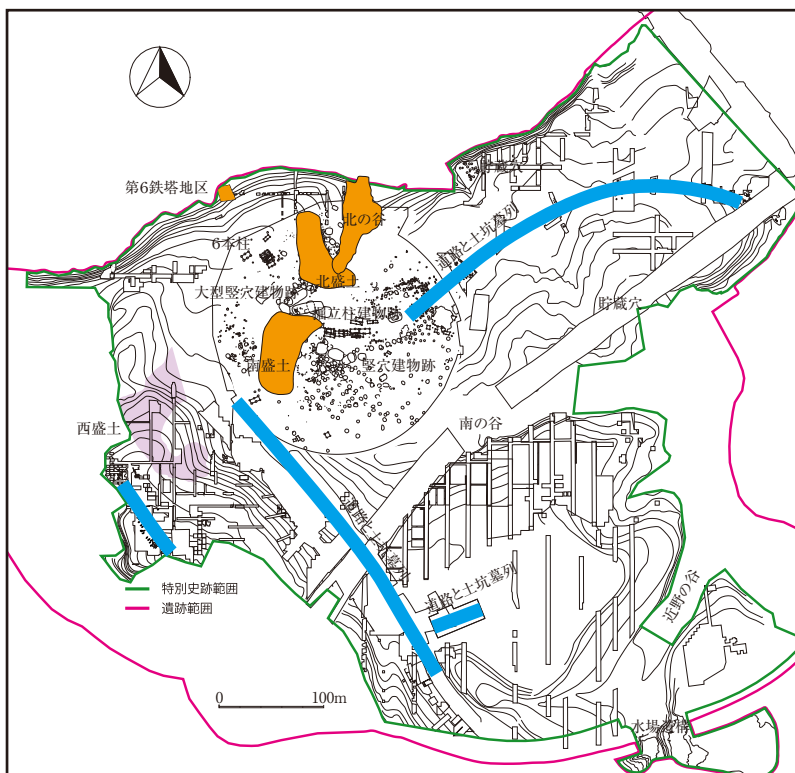
なった。このことから、三内丸山遺跡が交易・交流の拠点として機能していたと考えられている（斎藤2007など）。そのため、縄文時代は、自給自足という従来のイメージとは異なり、必要な物資を遠隔地から持ち込み、広範囲に人間関係のネットワークが形成されていたといえよう。

こうした広範囲に動く遺物の一つに磨製石斧（写真4）がある。磨製石斧は、研磨によって製作され、長軸一端に刃部を有する縦長の石器であり、木の伐採・加工具として用いられた道具である（註1）。縄文文化はさまざまな木製品を活用しており、磨製石斧の需要はかなり高かった

と考えられる。例えば、三内丸山遺跡では、針葉樹の樹皮を編んで製作した縄文ポシエットや、トチノミのアク抜き施設である水場遺構、通称6本柱と呼ばれる、直径1m弱のクリ材の柱などがみついている。この柱には磨製石斧で加工した痕跡もみついている。

縄文人は、必要な道具の材料は近隣から手に入れて製作しているが、磨製石斧の場合、材料は限定された地域で採取され、専門的な製作遺跡がみついている。そのため、磨製石斧は、縄文時代の交易を示す遺物の一つとして考えられている（林2004）。交易は単なるモノのやりとりの経済活動でなく、親族関係、社会慣習、宗教等さまざまな社会規約によって縛られていると考えられている（モース1973など）。

さらに、磨製石斧は、石材や製作技術に地域性がみられる（高橋2018）。三内丸山遺跡が属する円筒土器文化圏は、土器等の分析から、渡島、下北、津軽、南部の地域性が指摘されている（小笠原1974など）。渡島は地理的に分離してい



### 三内丸山遺跡の特徴

- ①各施設が場所を決めて計画的・規則的に配置
- ②集会施設・祭祀施設・集団墓地・食料貯蔵施設がある。
- ③居住期間が長い
- ④多様な生活の道具
- ⑤社会的宗教的の遺物が多い。

こうした特徴から、三内丸山遺跡は、陸奥湾沿岸一帯の拠点的な集落と考えられる。

図1 三内丸山遺跡遺跡遺構配置図

るので、地域性も容易に予測できるが、陸続きの南部と津軽は、これまでも文化的に異なることが経験的に把握されてきた。磨製石斧の地域性も、円筒土器文化圏の地域性と関連しているのではと考えられるが、地域性を発生させるメカニズムについてはよく分かっていない。

ここで、三内丸山遺跡の磨製石斧を中心に取り上げ、石材と、製作技術をもとに、磨製石斧の生産と流通について検討することで、円筒土器文化圏、特に津軽と南部の地域性の発生した原因について論じる。

## 第1章 磨製石斧の研究について

磨製石斧の生産と流通から、地域性を検証するため、磨製石斧の石材と製作技術の他に、地域性と交易という4つの視点を検討し、問題点を整理する。

### (1) 石材について

木の伐採・加工という用途から、磨製石斧の素材は、硬質であるが、衝撃に耐えられる粘りがあり、一定方向に結晶が並び緻密な構造をした石材が適してい

る。主に、緑色岩、青色片岩、角閃岩、花崗閃緑岩、ホルンフェルス、砂岩、安山岩、凝灰岩、蛇紋岩などが用いられている（註2）。

緑色岩（写真5）は、かつては輝緑凝灰岩、緑色ホルンフェルス、緑色泥岩、片岩などと記載されてきたが、青森県では、しだいに緑色細粒凝灰岩という名称に統一された。

三内丸山遺跡出土の磨製石斧を分析した合地信生（2004、2006、2009など）は、この岩石について、北海道日高地方、沙流川一帯で採取でき、粘りのある石材であり、高压低温の変成作用で成長した緑色を呈し、緑色片岩と呼称した。特に青色と緑色の濃淡で縞模様が形成されるところから「アオトラ石」とも呼ばれている。

その後、前川寛和（2007）は結晶構造などを分析した結果、岩石に片理構造が認められないので、緑色岩という呼称を用い、現在はこの名称が一般的に用いられている。

緑色岩は、これまで北海道・北東北を中心に流通していると考えられてきたが、宮城県・山形県まで広がっていることが確認され（斎藤2007）、近年では関東地方まで広がる可能性が指摘されている。

青色片岩（写真6）は、藍閃石を含む結晶片岩が、高压低温の変成作用で成長した濃い青色を呈する石材であり、北海道神居古潭構造帯で採取できる。緻密で硬いが、粘りがなく、緑色岩と比べるともろい性質がある（合地2004など）。この構造帯では角閃岩も採集できる。

他に磨製石斧の石材として、花崗閃緑岩（写真7）・閃緑岩・花崗岩、ホルンフェルス、砂岩、凝灰岩、安山岩、粗粒玄武岩、蛇紋岩（写真8）がある。青森県内では、種差海岸において粗粒玄武岩が、下北半島で花崗閃緑岩・閃緑岩・花崗岩が採取できる（斎藤2002）。岩手県に広がる北上山地でも同様に、各種磨製石斧に適した石材が採取でき、その中で



写真5 緑色岩



写真6 青色片岩



写真7 花崗閃緑岩



写真8 蛇紋岩

特に著名なのが早池峰山一帯で採取できる蛇紋岩である。

このように、地域毎に磨製石斧の石材は、異なっていることが判明している。

## (2) 製作技術について

磨製石斧は、強い衝撃に耐えられるよう、研磨によって角をとり、曲線状に加工する。製作はいくつかの工程を踏んでいく。

石器を作るため、石を加工する技術は、打ち割る剥離、叩いて表面の凹凸をなくす敲打、表面を磨く研磨がある。磨製石斧の製作には、ほぼそのすべての技術が用いられる。さらに磨製石斧には、石製の鋸のような道具（擦切具）で溝を切る、擦切技法（註3）も用いられている。

工程の詳細は後述するとして、磨製石斧は、石材によってこの4つの技術を使い分けながら、製作していることが指摘されている（斎藤2004、高橋2016など）。

また、製作工程の複雑さから、磨製石斧はどこでも製作されているわけではない。磨製石斧を製作した遺跡は、製作途上の資料や、製作工具の存在等をもとに

認識される。現時点で製作遺跡が確認されているのは、北海道、下北地域、陸奥湾沿岸、三八地域から岩手県北上山地、秋田・山形県境にかけてである。津軽から秋田県にかけての日本海側には製作遺跡はほぼみられない。

そして、製作技術は、後述するが、石材によって使い分けられており、石材同様に、地域毎に異なっていることが判明している。

## (3) 地域性について

生産と流通を考える際に整理しなければならないのが地域性の問題である。

考古学の地域性は、主に土器型式の分布で区分している。三内丸山遺跡の時代の東北地方は、秋田市・盛岡市を結ぶラインを境に、北の円筒土器文化圏と南の大木式土器文化圏に大きく分かれる。さらに、円筒土器文化圏内でも、渡島、下北、津軽、南部といった地域性がみられる（小笠原1974など）。

磨製石斧の生産と流通を考える際には文化圏以外に交易圏（八幡1938abc）の視点も必要である。原産地と消費地の距離が離れている場合、特定物資の原産地、当該物資の流通範囲から交易圏が設定されている。

社会的な分布である文化圏と、モノの流通を示す交易圏は必ずしも一致しないことが指摘されている（図2上段）。

八幡の考えをより整理したのが、林謙作（2004）である。林は地域を考えるうえで、等質地域と結節地域という地理学の概念（手塚1991）を導入した。

等質地域は、ある属性の存否のみが対象となる。つまり、まったく異なった性格をもつ空間が、境界線をはさんで接するもので、自給自足的に完結した生活を営む世界に有効な概念である。

等質地域は、特徴的な遺物の分布から文化圏・地域性等を区分しており、上記の円筒土器文化圏なども、円筒土器とい

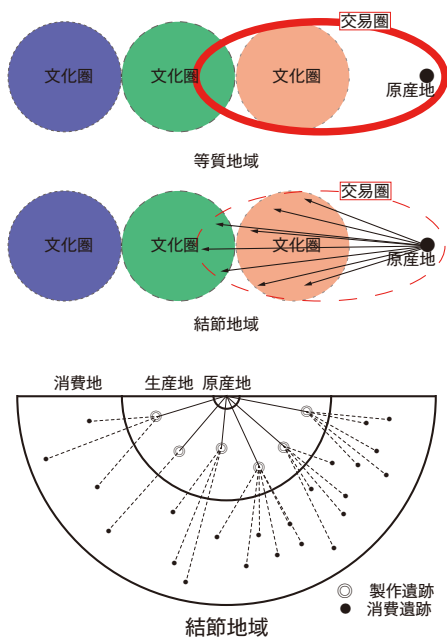


図2 地域の模式図

う土器の分布から導き出された等質地域の考えによっている。

一方の結節地域は、互いに性格の異なる地点が機能的に結びつくことで1つの地域を形成していることを示している。本来は工業、近代都市、観光や人口移動など、あわただしい人の動きを把握するために登場した概念である。具体的には生産地と消費地を結ぶことであり、磨製石斧の場合、原産地、製作遺跡、消費遺跡の関係を捉えることである（図2中段・下段）。

緑色岩のように、東北地方では入手がむずかしい物資は、非現地性物資（林前掲）と呼ばれている。縄文人は、非現地性物資を遠隔地の原産地から直接入手していたとは考えられない。交換して持ち込まれていたとすれば、流通は人間活動によって生み出される。地理学において、地域性を形成する一番の要因は人間関係とされている（手塚前掲）。そして、人間関係にはモノのやり取りが付随しており、これが地域性を発生させる一つの要因ではないかと考えられる。

#### （4）交換について

生産物が広域に流通すると、そこに交換が発生する。次にこの交換について整理する。

柄谷行人（2010、2015、2020）は、史的唯物論的生産様式では歴史は十分に説明ができなるとし、交換様式から世界史の再構築を試みている。そして縄文文化を含む先史時代は、西田正規（1986）の定住革命をもとに、贈与という交換様式によって社会が規定されていると結論した。

しかし、柄谷は先史時代の交換の具体的な事例を用いて論じているわけではないため、交換様式ですべて説明できるかは今後の検証も必要である。また、柄谷が根拠としている西田の理論は、生態系に基づいた環境適応の視点、つまりその地域での自給自足をモデルとした等質地域の考え方である。西田が交換について論じているのは、共同体内での分配（相互扶助）である。共同体間で行われる交換についての議論はない。

ただ、柄谷が指摘した贈与、交換という人間活動が社会に大きな影響を与えていることについては注目に値する。この贈与についての古典的な業績がモース（1973）の『贈与論』である。

モースは、モノの流通は、経済関係のみでなく、さまざまな宗教・社会規範・親族構造・生活などが複雑にからみあっており、これを「全体的給付関係」と定義した。贈与社会における贈与とは、公権力をもたない社会における安全装置としても働いている。

贈与は3つの義務である「贈る」・「受け取る」・「お返し」で構成されている。モースは贈与関係において、贈与のメカニズムはお返しを強制させるメカニズムが説明できないと、互酬性や贈与の原理が見えてこない点を強調し、お返しを強いるメカニズムから、贈与社会について論じた。そして、メカニズムの原因は、

経済的な動機というよりも、モノに宿る霊的なものが返報を強いるとした。

この贈与は、モノのみでなく、結婚（女性の交換）、食事の提供、役務の従事、奉仕、踊り、芸能などもあり、こうした贈与を繰り返すことで、他者との関係を継続することが可能となる。

民族調査等において、贈る義務と返済の義務は詳細に論じられているが、受け取る義務についての言及はほぼない。受け取る義務を放棄することは、相手との敵対関係を示したと受け止められ、争いのもとになってしまうなど、これが全面にでるのは、人間関係の距離が開いた時である。

また、お返し割合は人間関係・親族関係の距離、均衡と不均衡で変化していることも指摘されている（サーリンズ1984、伊藤1996）。

しかし、上述のことを考古学的に証明することは難しい。とくに、考古学は受け取った結果は残るが、民族学で詳細に議論されたお返しの義務は、何を対価として返したかは証明できない上、相互間の直接のやりとりを明らかにできない。そのため、考古学では贈与か交易かを判断できないのである（林2004）。

ただ、その土地で産出されない物資、非現地性物資が空間的に離れた地域に継続的に出現することは、交換が継続的に行われていたことを示している。つまり分布が継続するか、断絶するかは地域間交流の濃淡の反映といえる。

贈る義務は生産地、受け取る義務は消費地から判断されるからこそ、先史時代の交換は、生産地と消費地の関係、つまり結節地域の分析が必要となる。

#### (5) 分析の視点

上記(1)から(4)についてそれぞれ検討を加えた。

磨製石斧の石材と製作技術をもとに、生産と流通を明らかにし、そこから地域

性を考えるには、石材が識別しやすく、製作技術が特徴的であり、原産地・製作地が明確で、そして広域に流通する資料が望ましい。これらの条件を満たすものとして、緑色岩の磨製石斧があげられる。そこで、この磨製石斧を結節地域、つまり原産地・生産地・消費地の観点から整理したうえで、地域ごとの生産と流通を明らかにしていく。

そして、三内丸山遺跡の磨製石斧を中心として、石材と製作技術を明らかにした上で、円筒土器文化圏全体そして、大木式土器文化圏と比較していき、地域性が生じた背景を論じる。

## 第2章 属性基準

磨製石斧は、研磨によって製作され、長軸一端に刃部を有する縦長の石器である。分析にあたり、以下の属性を設定した。

**器種分類**：磨製石斧、小形磨製石斧（長さ7cm以下）、転用、未製品、原石・残核、剥片に区分した。

**石材**：報告書に記載された石材名を、緑色岩、青色片岩、角閃岩、蛇紋岩、花崗閃緑岩（花崗岩、閃緑岩含む）、変成岩、火成岩、堆積岩に分類した。

**断面形態**（図3）：磨製石斧の器体中央もしくはそれに準ずる部分における断面形態を、A（正方形）、B（長方形）、C（レンズ形）に区分した。

**側面形態**（図3）：磨製石斧の器体中央もしくはそれに準ずる部分における側面形態を、a（定角）、b（有段）、c（丸い）に区分した。

以下、断面形態と側面形態は組み合わせて論じるが、断面形態Cは、側面関係と組み合わせられないので、単独で用いる。

**欠損**（図3欠損模式図）：完形、準完形（全体形状が理解できる程度の欠損）、刃部欠損、基部欠損、半割、基部断片、刃部断片、断片に区分した。

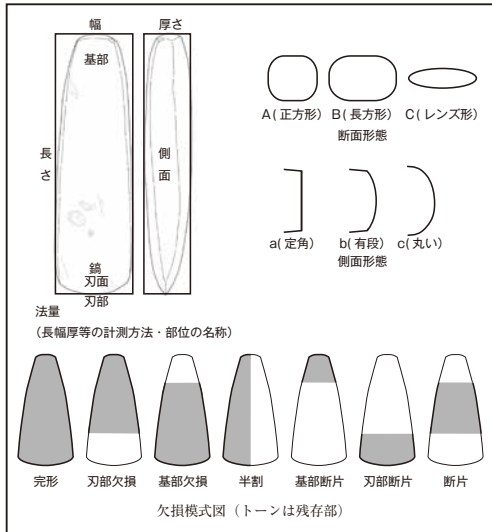


図3 磨製石斧の属性基準

製作技法（図4）：製作技法は、敲打技法、剥離技法、擦切技法に区分した。原石、製作（未製品）、製品に区分し、一連の工程に細分した。

敲打技法は、原石を剥離によって整形（第2・3工程）した後に、石器表面を敲石によって全体の形状を敲打で整え（第4工程）、研磨（第5工程）して仕上げる。

剥離技法は、敲打技法から、敲打（第4工程）を省略し、剥離のみで整形してから、研磨して仕上げる。

擦切技法は、擦切具によって、原石に溝を切り（第a工程）、その溝の部分から石を叩き折って（第b工程）成形し、最後に研磨で仕上げる。

第7工程の転用は、磨製石斧を敲石、楔など他の器種に作り替えることである。

### 第3章 三内丸山遺跡出土磨製石斧の分析

円筒土器文化圏の磨製石斧の特徴を把握するため、一定の出土量と、磨製石斧の時期が明確な三内丸山遺跡出土の磨製石斧を分析することで、磨製石斧の特徴、特に石材と製作技術を把握する。

#### 1 分析地点について（図1、表1）

三内丸山遺跡出土の磨製石斧から、時期が明確で一定の出土量がある地点から資料を選択した。選択した地点は、三内

丸山遺跡の第6鉄塔地区、北盛土、南盛土、北の谷、竪穴建物跡である。

北盛土は、東西80m、南北30～60mの規模であり、全体にL字形を呈している。堆積層は、厚いところで2m近くあり、前期の第Ⅲb層、中期の第Ⅲa層に区分できる。

南盛土は、北盛土の南側、南の谷の北西側にあり、縄文時代中期の2m近くの堆積が確認されている。その下には前期の層が広がる。盛土は、基本中期前葉から後葉にかけての遺物が主体である。

第6鉄塔地区は、三内丸山遺跡の北端部に位置している。縄文時代前期の捨て場が確認されている。

北の谷は、遺跡の北端部、北盛土の東側に位置し、縄文時代前期から中期にかけて形成された捨て場である。主に前期の資料が多い。

竪穴建物跡は、前期から中期にかけて確認されている。

#### 2 分析資料の選別

上述の地点から出土した磨製石斧関連資料は、1,015点であり、器種の細分類は、磨製石斧、小形磨製石斧、転用、未製品、原石、残核、剥片である（表2）。転用は石錘、敲石、楔などが確認されている。

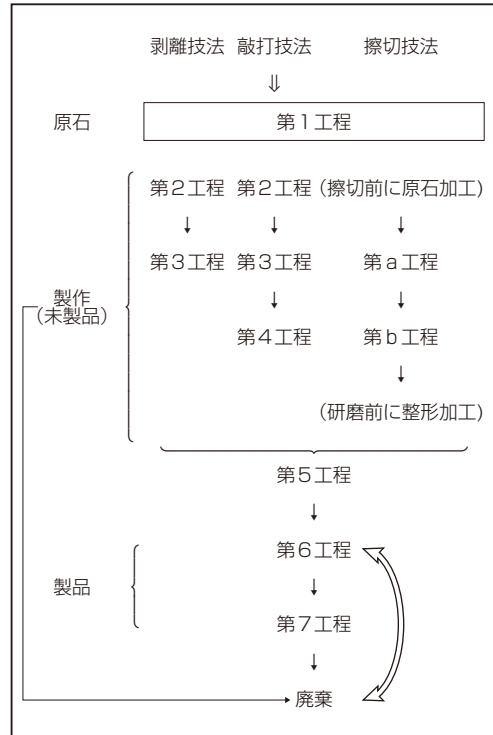
分析資料の選別として、研磨がみられるのみで、磨製石斧の形状をなさない剥片237点は分析資料から省く。

表1 三内丸山遺跡の基本層序と時期（青森県教育委員会2017から転用）

| 時代     | 土器型式 | 北地区  |      |      |        |                | 南地区  | 近野地区   |        |
|--------|------|------|------|------|--------|----------------|------|--------|--------|
|        |      | 段丘上  | 北盛土  | 北の谷  | 第6鉄塔地区 | 北東端(小三内) (遺跡跡) |      | 段丘上    | 沢部分    |
| 縄文時代前期 | 丸筒土器 | 第Ⅰ層  | 第Ⅰ層  | 第Ⅰ層  | 第Ⅰ層    | 第Ⅰ層            | 第Ⅰ層  | 1～6層   | 7層     |
|        |      | 第Ⅱa層 | 第Ⅱa層 | 第Ⅱa層 | 第Ⅱa層   | 第Ⅱa層           | 第Ⅱa層 |        |        |
|        |      | 第Ⅱb層 | 第Ⅱb層 | 第Ⅱb層 | 第Ⅱb層   | 第Ⅱb層           | 第Ⅱb層 |        |        |
| 縄文時代中期 | 丸筒土器 | 第Ⅲa層 | 第Ⅲa層 | 第Ⅲa層 | 第Ⅲa層   | 第Ⅲa層           | 第Ⅲa層 | 9～11層  | 12～15層 |
|        |      | 第Ⅲb層 | 第Ⅲb層 | 第Ⅲb層 | 第Ⅲb層   | 第Ⅲb層           | 第Ⅲb層 |        |        |
|        |      | 第Ⅲc層 | 第Ⅲc層 | 第Ⅲc層 | 第Ⅲc層   | 第Ⅲc層           | 第Ⅲc層 |        |        |
| 縄文時代後期 | 丸筒土器 | 第Ⅳ層  | 第Ⅳ層  | 第Ⅳ層  | 第Ⅳ層    | 第Ⅳ層            | 第Ⅳ層  | 12～15層 | 16～18層 |
|        |      | 第Ⅴ層  | 第Ⅴ層  | 第Ⅴ層  | 第Ⅴ層    | 第Ⅴ層            | 第Ⅴ層  |        |        |
|        |      | 第Ⅵ層  | 第Ⅵ層  | 第Ⅵ層  | 第Ⅵ層    | 第Ⅵ層            | 第Ⅵ層  |        |        |

| 作業   | 内容                            | 高橋2016の分類 |
|------|-------------------------------|-----------|
| 第1工程 | 原石・石核・素材剥片                    | 第1類・第a類   |
| 第2工程 | 素材に対し、剥離が加えられる。<br>成形剥離(粗割)   | 第2類       |
| 第3工程 | 第2工程の剥離が進行し、より石斧の形状に近い状態。整形剥離 | 第3類       |
| 第4工程 | 敲打                            | 第d類       |
|      | a 剥離の範囲が大きい                   | 第4a類      |
|      | b 剥離と敲打の割合が等しい                | 第4b類      |
|      | c 敲打の範囲が大きい                   | 第4c類      |
|      | d 全面敲打                        | 第5類       |
| 第5工程 | 研磨整形が見られる。                    | 第6類・第e類   |
| 第6工程 | 完成品                           | 第7類・第f類   |
| 第7工程 | 磨製石斧の再加工や、転用。                 | 第8類・第g類   |
| 第a工程 | 擦切                            | 第b類       |
| 第b工程 | 擦切+叩き折り                       | 第c類       |

※ Fl = 剥離  
Pe = 敲打  
Sa = 擦切  
Po = 研磨



敲打痕(第4工程)

敲打の状況  
敲打技法

敲打技法

第1工程 第2工程 第3工程 第4工程 第5工程

擦切技法

第1工程 第a工程 第b工程 第5工程

残片 残片

擦切痕(赤棒の範囲)

擦切具と擦切の状況(第a工程)

擦切技法

第7工程(転用[敲石])

第6工程

図4 磨製石斧の製作工程について



表2 各地点の器種

| 細分類    | SI | 6鉄塔 | 北盛土 | 南盛土 | 北の谷 | 総計   |
|--------|----|-----|-----|-----|-----|------|
| 磨製石斧   | 29 | 48  | 285 | 140 | 154 | 656  |
| 小形磨製石斧 |    |     | 22  | 16  | 6   | 44   |
| 転用     | 2  | 2   | 30  | 13  | 14  | 61   |
| 未製品    |    |     | 2   | 1   | 4   | 7    |
| 原石     | 1  |     | 2   | 1   |     | 4    |
| 残核     |    |     | 4   | 2   |     | 6    |
| 剥片     | 2  | 52  | 112 | 16  | 55  | 237  |
| 総計     | 34 | 102 | 457 | 189 | 233 | 1015 |

次に、古代以降に形成された第Ⅰ層、第Ⅱ層から出土した資料を除外し、さらに第1工程の原石・残核、未製品の第2～5工程を除外した。

最後に、最小個体数を算定するため、破損率を検討した。破損率が低い完形、準完形、刃部欠損、基部欠損、断片の361点を分析資料として取り上げた(表3)。

表3 細分類と欠損

| 細分類    | 完形 | 準完形 | 刃部欠損 | 基部欠損 | 断片 | 総計  |
|--------|----|-----|------|------|----|-----|
| 磨製石斧   | 25 | 11  | 162  | 34   | 62 | 294 |
| 小形磨製石斧 | 5  |     | 10   | 4    | 8  | 27  |
| 転用     | 4  | 1   | 16   | 7    | 12 | 40  |
| 総計     | 34 | 12  | 188  | 45   | 82 | 361 |

### 3 分析

#### (1) 形態

磨製石斧の全体の形状は、基部と刃部の幅が同じ、もしくは基部幅が刃部幅よりも狭い形態が基本である。

形態的に特に変異が大きいのが、断面・側面形態である。断面・側面形態(註4)は、Bb有段が一番多い。次にBc丸い、そしてCが続く(表4)。

表4 断面・側面形態

| 断面・側面形態 | 集計  | 断面・側面形態 | 集計  | 断面・側面形態 | 集計 |
|---------|-----|---------|-----|---------|----|
| Aa定角    | 3   | C       | 52  | Aa定角    | 4  |
| Ab有段    | 10  | Xb有段    | 1   | Ba定角    | 1  |
| Ac丸い    | 2   | Xc丸い    | 7   | Bb有段    | 9  |
| Ba定角    | 17  | Xx不明    | 8   | Bc丸い    | 4  |
| Bb有段    | 154 | 総計      | 334 | C       | 8  |
| Bc丸い    | 80  |         |     | Xx不明    | 1  |
|         |     |         |     | 総計      | 27 |

(小形磨製石斧)

小形磨製石斧は、27点中9点、8点とBb有段とCが相対的に割合が高い。

#### (2) 石材

磨製石斧の石材構成は、全体の約6割が緑色岩である(表5)。次いで花崗閃緑岩、青色片岩、角閃岩である。

分析資料から漏れているが、蛇紋岩製も出土している。

表5 器種分類と石材

| 細分類    | 緑色岩 | 青色片岩 | 角閃岩 | 変成岩 | 花崗 | 火成岩 | 堆積岩 | 不明 | 総計  |
|--------|-----|------|-----|-----|----|-----|-----|----|-----|
| 磨製石斧   | 171 | 11   | 27  | 6   | 53 | 10  | 10  | 6  | 294 |
| 小形磨製石斧 | 18  | 2    | 3   | 1   | 1  |     | 2   |    | 27  |
| 転用     | 22  | 1    | 4   |     | 10 | 2   | 1   |    | 40  |
| 総計     | 213 | 14   | 34  | 7   | 65 | 12  | 14  | 6  | 361 |

表6 石材と断面形態・側面形態

| 断面・側面形態 | 緑色岩 | 青色片岩 | 角閃岩 | 変成岩 | 花崗 | 火成岩 | 堆積岩 | 不明 | 総計  |
|---------|-----|------|-----|-----|----|-----|-----|----|-----|
| Aa定角    | 5   |      |     | 1   |    |     |     |    | 6   |
| Ab有段    | 9   | 1    |     |     |    |     |     | 1  | 11  |
| Ac丸い    | 1   |      |     |     | 1  |     |     |    | 2   |
| Ba定角    | 15  |      | 1   |     | 2  |     |     |    | 18  |
| Bb有段    | 112 | 5    | 14  | 2   | 17 | 4   | 7   | 2  | 163 |
| Bc丸い    | 20  | 1    | 9   | 2   | 41 | 6   | 5   |    | 84  |
| C       | 41  | 6    | 8   | 2   |    | 2   | 1   |    | 60  |
| Xb有段    | 1   |      |     |     |    |     |     |    | 1   |
| Xc丸い    |     | 1    | 1   |     | 3  |     |     | 3  | 8   |
| Xx不明    | 7   |      | 1   |     |    |     |     |    | 8   |
| 総計      | 213 | 14   | 34  | 7   | 65 | 12  | 14  | 6  | 361 |

[石材と断面形態・側面形態] 上述のBb有段、Bc丸い、そしてCは、Bb有段が緑色岩、Bc丸いが花崗閃緑岩、Cが緑色岩、青色片岩や角閃岩と対応し、断面・側面形態が石材と関連している傾向がある(表6)。

#### (3) 製作技術

361点の製品に、16点の未製品を加えた377点について検討する。

器種分類と工程は(表7)、製品がほとんどであり、わずかに原石、擦切残核、敲打途上品等、製作途上の未製品、製作工具が確認されている。遺跡で磨製石斧の製作が行われていたことを示している。なお、工程を示す資料は縄文時代前期の層から出土している。

表7 工程

| 工程 | 1 | 3 | 4a | 4d | 6   | 7  | 総計  |
|----|---|---|----|----|-----|----|-----|
| 総計 | 9 | 2 | 4  | 1  | 305 | 56 | 377 |

〔石材と製作技術〕 石材ごとの主要な製作技法をみってみる。ほとんどが研磨によって前の工程が消されているが、残された製作痕跡から、以下の傾向がみられる（表8）。

擦切技法：緑色岩にみられる。

剥離技法：緑色岩、青色片岩、角閃岩に主にみられる。

敲打技法：基本は花崗閃緑岩である。一部緑色岩にもちいられるが、緑色岩では、敲打は、研磨よりも新しく、再加工と思われる。

各技法は、先の断面・側面形態も含めて、石材の種類と関連している。磨製石斧の形態は、石材と製作地に対応していることが明らかになった。

細分類と製作技術の関係（表9）は、小形磨製石斧は、敲打痕はなく、剥離で製作している（図6-4）。敲打技法は、強い力を石器に与えるため、小形磨製石斧には不向きな技法のためであろう。

特異な例として、側面に溝をいれた磨製石斧が確認されている（図6-3）。類例は北海道静川22遺跡や、岩手県芋田沢田IV遺跡でみられる。

表8 石材と製作技術

| 石材   | Fl    |    | Pe | Sa    |       |    | Po  | 総計  |
|------|-------|----|----|-------|-------|----|-----|-----|
|      | Pe,Po | Po | Po | Fl,Po | Pe,Po | Po |     |     |
| 緑色岩  |       | 52 | 6  | 2     | 1     | 59 | 91  | 211 |
| 青色片岩 |       | 10 |    |       |       |    | 4   | 14  |
| 角閃岩  | 2     | 16 | 1  |       |       | 1  | 14  | 34  |
| 変成岩  |       | 5  |    |       |       |    | 2   | 7   |
| 花閃   | 2     | 8  | 24 |       |       |    | 30  | 64  |
| 火成岩  |       |    | 3  |       |       |    | 9   | 12  |
| 堆積岩  |       | 2  | 2  |       |       |    | 9   | 13  |
| 不明   |       |    | 1  |       |       |    | 5   | 6   |
| 総計   | 4     | 95 | 37 | 2     | 1     | 60 | 166 | 361 |

表9 器種と製作技術

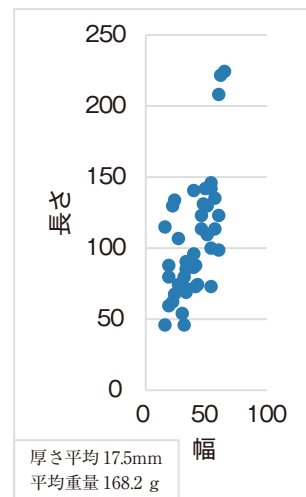
| 細分類    | Fl    |    | Pe | Sa    |       |    | Po  | 総計  |
|--------|-------|----|----|-------|-------|----|-----|-----|
|        | Pe,Po | Po | Po | Fl,Po | Pe,Po | Po |     |     |
| 磨製石斧   | 3     | 87 | 30 | 1     | 1     | 47 | 125 | 294 |
| 小形磨製石斧 |       | 4  |    |       |       | 8  | 15  | 27  |
| 転用     | 1     | 2  | 7  | 1     |       | 5  | 24  | 40  |
| 総計     | 4     | 95 | 37 | 2     | 1     | 60 | 166 | 361 |

〔製作工具〕 擦切具（図6-6）は、主に縄文時代前期の層から出土している。未製品は縄文時代前期のみに見られるので、製作工具との相関関係が確認できた。

#### （4）法量

ほとんどが破損であるが、完形と準完形から大形品は224mmのヒン岩（写真4）、222mmの花崗閃緑岩製で、縄文時代中期（第Ⅲa層）から出土している。緑色岩では、145mmである。よって大形品は基本火成岩製である（表10）。

表10 長幅比（単位mm）



#### （5）時期ごとの動向

【石材】 縄文時代前期には、第6鉄塔地区・北盛土・北の谷は、緑色岩が圧倒的な割合を示している（表11）。

竪穴建物跡の場合は、竪穴建物跡の構築時期と竪穴建物跡の廃棄後の時期が異なり、両者を厳密に区分していないので、他の3地点と異なる結果となっている。

中期になると、第6鉄塔地区では緑色岩は6割であるが、北盛土・南盛土においては、緑色岩の割合は5割以下となり、石材構成から北海道の二風谷の他に、神居古潭、火成岩・堆積岩製磨製石斧を獲得するようになっており、青色片岩、火成岩・堆積岩の割合が相対的に高くなっている。

【製作技術】(表12) 前期において、第6鉄塔地区・北の谷・北盛土から綠色岩の割合に連動して、擦切技法が多い。さらに、製作工具である擦切具や、製作途上で生じた擦切残核(図6-5)が出土している。

敲打技法の磨製石斧は、第4工程等の未製品が北の谷から出土している。

このことから、遺跡内で擦切技法と敲打技法の磨製石斧を小規模ながら製作していたことが伺える。

中期になると、神居古潭や北上山地と推定される石材が増えることと連動し

て、剥離(図6-1)・敲打技法の割合が相対的に高くなり、製作技術と石材が連動していることが確認できた。

また、前期と異なり、遺跡内では製作技術を示す痕跡はみられないことから、基本的に磨製石斧はすべて搬入品と思われる。

次の章では、他地域を石材・製作技術の観点からみていきたい。

表11 時期と石材

| 時期    | 綠色岩 | 青色片岩 | 角閃岩 | 変成岩 | 花閃 | 火成岩 | 堆積岩 | 不明 | 総計  |
|-------|-----|------|-----|-----|----|-----|-----|----|-----|
| 6鉄塔   |     |      |     |     |    |     |     |    |     |
| 前期    | 19  |      |     |     |    |     | 1   |    | 20  |
| 中期    | 8   | 1    | 1   |     | 2  |     |     |    | 12  |
| 集計    | 27  | 1    | 1   |     | 2  |     | 1   |    | 32  |
| 北盛土   |     |      |     |     |    |     |     |    |     |
| 前期    | 20  | 1    |     |     | 3  | 1   | 2   | 1  | 28  |
| 中期    | 62  | 6    | 15  | 1   | 34 | 5   | 1   | 5  | 129 |
| 集計    | 82  | 7    | 15  | 1   | 37 | 6   | 3   | 6  | 157 |
| 南盛土   |     |      |     |     |    |     |     |    |     |
| 中期    | 26  | 4    | 14  | 6   | 15 | 3   | 4   |    | 72  |
| 北の谷   |     |      |     |     |    |     |     |    |     |
| 前期    | 53  |      | 1   |     | 5  |     |     |    | 59  |
| 前・中期  | 12  | 2    | 2   |     | 2  |     | 1   |    | 19  |
| 中期    |     |      |     |     | 2  |     |     |    | 2   |
| 集計    | 65  | 2    | 3   |     | 9  |     | 1   |    | 80  |
| 竪穴建物跡 |     |      |     |     |    |     |     |    |     |
| 前期    | 5   |      |     |     | 1  | 1   | 2   |    | 9   |
| 中期    | 6   |      | 1   |     |    | 2   | 2   |    | 11  |
| 集計    | 11  |      | 1   |     | 1  | 3   | 4   |    | 20  |
| 総計    | 211 | 14   | 34  | 7   | 64 | 12  | 13  | 6  | 361 |

表12 時期と製作技術

| 時期 | Fl    |    | Pe | Sa    |       |    | Po  | 総計  |
|----|-------|----|----|-------|-------|----|-----|-----|
|    | Pe,Po | Po | Po | Fl,Po | Pe,Po | Po |     |     |
| 前期 |       | 25 | 6  | 1     |       | 41 | 62  | 135 |
| 中期 | 4     | 68 | 31 | 1     | 1     | 19 | 102 | 226 |
| 総計 | 4     | 93 | 37 | 2     | 1     | 60 | 164 | 361 |

表13 分析地点ごとの石材構成(前期)

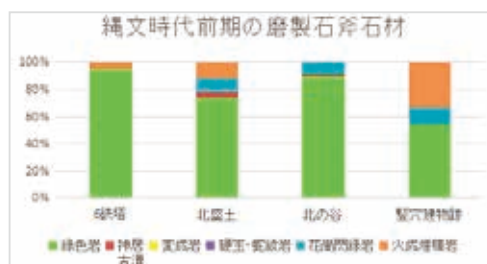


表14 分析地点ごとの石材構成(中期)

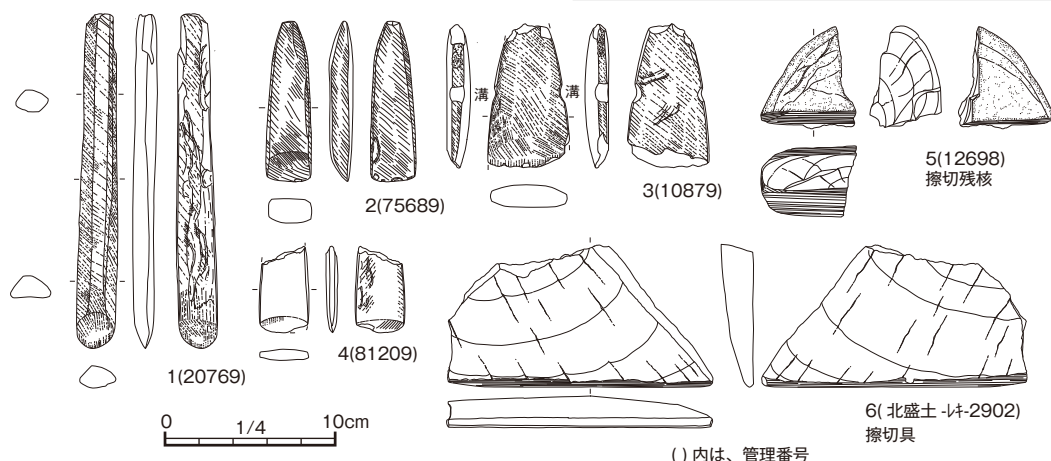
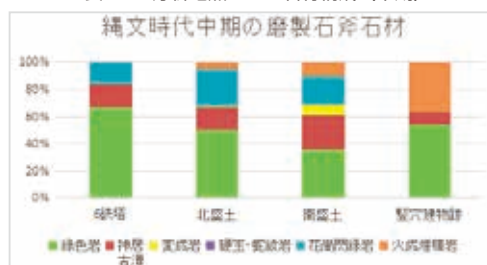
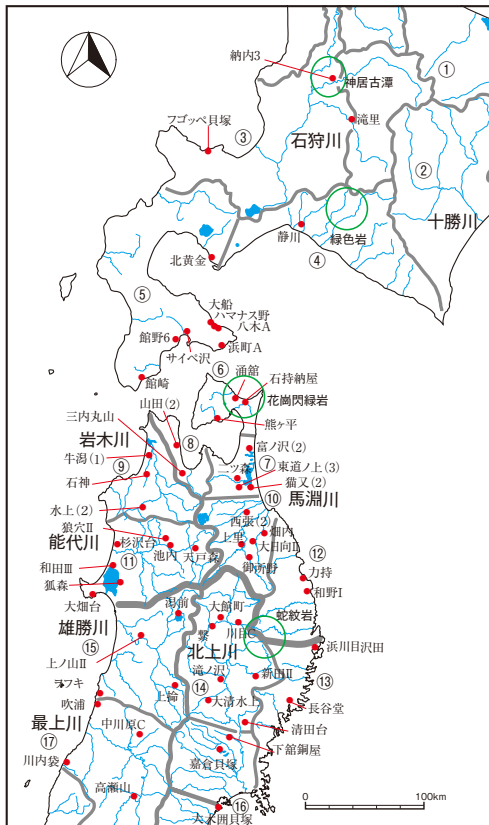


図6 三内丸山遺跡出土の磨製石斧

第4章 他地域との比較

前章で三内丸山遺跡の動向をみたが、この章では、他地域の動向を探ることで、円筒土器文化圏の磨製石斧の動きを把握する。

地域区分については、土器から津軽・南部・下北などに区分されているが（小笠原1974など）、この区域を地形の視点からみると、一級河川と分水嶺ごとに区分できるので（註5）、これを基準に①から⑰地域に区分した（図5）。



| 地区         | 地区        |
|------------|-----------|
| ①：オホーツク沿岸  | ⑩：馬淵川流域   |
| ②：十勝川流域    | ⑪：米代川流域   |
| ③：石狩川流域    | ⑫：三陸海岸北部  |
| ④：苫小牧・日高地域 | ⑬：三陸海岸南部  |
| ⑤：渡島半島     | ⑭：北上川中上流域 |
| ⑥：下北地域     | ⑮：雄勝川流域   |
| ⑦：上北地域     | ⑯：北上川下流域  |
| ⑧：陸奥湾沿岸    | ⑰：最上川流域   |
| ⑨：岩木川流域    |           |

図5 地域区分と代表的な遺跡

土器文化圏は、時代ごとに変化があるので、あくまで目安であるが、円筒土器文化圏は、⑤～⑫地域である。⑬～⑰地域及び、以南は大木式土器文化圏である。③④地域は緩衝地帯もしくは①②地域を

含め、北筒式土器文化圏となっており、北海道・東北地方の縄文時代前期・中期は、大きく3つの土器文化圏に分かれている。

小論は円筒土器文化圏の地域性、特に津軽と南部の差を、磨製石斧から検討するのが目的であるので、主に⑥から⑫地域の円筒土器文化圏の動向について検討する。また、円筒土器文化圏と隣接する大木式土器文化圏の⑭⑮地域を比較することで、円筒土器文化圏の地域性について、別の視点から検討したい。

主たる磨製石斧の生産地であり、地形的に分離している⑤地域の渡島半島など、他の地域は必要に応じて記載した。

そして、磨製石斧の石材の中でも特徴的であり、東北地方では入手がむずかしい非現地性物資である緑色岩の動向を中心に記述する。

なお、以下の記述における表15～18には前章で検討した三内丸山遺跡のデータは含まれていない。

(1) 円筒土器文化（表15～18）

ア ⑥地域

円筒土器文化圏の地域性における下北にあたる。

【前期】石材については、下北半島の尻屋崎を中心に、一帯で花崗閃緑岩が採集できる。緑色岩の原石も採取できるが、質が悪く、磨製石斧の素材としては適していない。

青森県むつ市涌館遺跡では、擦切技法の第a・b工程及び、敲打技法の第1～5工程の製作工程を示す資料が確認できた（表17）。さらに、擦切技法と敲打技法の磨製石斧を製作していた工房（竪穴建物跡）が確認されている。他に石持納屋遺跡、熊ヶ平遺跡で擦切具や第a・b工程の資料が出土している。

先で述べたように、この地域の緑色岩は質が悪いので、擦切痕を持つ緑色岩の原石は、北海道から搬入していたと考えられる。

【中期】分析した遺跡は少ないが、傾向としては、前期にあった製作遺跡がみられなくなることと、風間浦村沢ノ黒遺跡のように、緑色岩の割合が前期と比べ低下している。

#### イ ⑧地域

三内丸山遺跡のある地域であり、円筒土器文化圏の地域性における津軽にあたる。

【前期】小規模な製作遺跡が確認されている。擦切技法の製作遺跡を示す緑色岩の原石や、第 a・b 工程の資料及び、擦切具は青森県蓬田村山田（2）遺跡、青森市新町野遺跡、岩渡小谷（4）遺跡、熊平遺跡等、陸奥湾を取り囲むように確認されている。

また、前期後葉では、神居古潭産の青色片岩製磨製石斧が、わずかに確認できる。

【中期】⑥地域同様に、製作遺跡がみられなくなる。また、石材構成が、神居古潭や火成岩・堆積岩製の磨製石斧が増加してくる。

中期の末葉である大木10式併行期においても、青森市近野遺跡、三内丸山（6）遺跡、（9）遺跡のように北海道産が一定の割合を示している。

三内丸山遺跡も含め、⑧地域は、⑥地域とほぼ同じ動向である。陸奥湾を媒介とした両地域の交流が頻繁であったと思われる。

#### ウ ⑨⑩地域

円筒土器文化圏の地域性における津軽にあたる。

【前期】⑨⑩地域の日本海側は、青森県弘前市沢部（2）遺跡、大鰐町大面遺跡、秋田県大館市池内遺跡や狼穴遺跡等において、磨製石斧が火成岩・堆積岩製と緑色岩によって構成されており、特に、緑色岩の割合が高い。

つがる市牛潟（1）遺跡では擦切痕を

持つ大形の緑色岩の原石が出土しているが、磨製石斧の製作遺跡を示す未製品・工具の出土はほぼ確認できないので、この地域では磨製石斧はほぼ搬入品と考えられる。

【中期】⑨地域は、西目屋村水上（2）遺跡やつがる市石神遺跡などの大規模な遺跡がある。前期と比較して全体に緑色岩の割合が減少する。また、水上（2）遺跡では、蛇紋岩製の磨製石斧が出土している。大木10式併行期の鱈ヶ沢町餅ノ沢遺跡では北海道系の石材の割合は高い。

⑩地域は、鹿角市天戸森遺跡のように、中期には大木式土器文化圏になっている。緑色岩の割合は高いことが確認できた。文化圏は変化しても、磨製石斧の搬入は継続していたと思われる。

#### エ ⑦⑩地域

円筒土器文化圏の地域性における南部にあたる。

【前期】石材としては、北上山地において磨製石斧の石材が採取できる。そのため、緑色岩の占める割合が5割弱ほどである。石材として他に、東北町東道ノ上（3）遺跡で青色片岩、二戸市上里遺跡では、前期末葉に蛇紋岩製磨製石斧が確認されている。

製作については、八戸市畑内遺跡、岩手県軽米町大鳥 I 遺跡、大日向 II 遺跡では、敲打整形の磨製石斧の未製品と思われる第 3・4 工程の資料が確認されており、磨製石斧を製作していたと考えられる。

【中期】円筒上層 a 式期の八戸市笹ノ沢（3）遺跡、二戸市上里遺跡、中期中葉六ヶ所村富ノ沢（2）遺跡では、緑色岩の割合が低い。一戸町御所野遺跡では緑色岩は小形品が多いと言う特徴もある。

#### オ ⑫地域

この地域は、粗粒玄武岩等の、磨製石斧に適した石材が得られる。そのため、

前期前葉以前から（註6）、敲打技法の磨製石斧の製作遺跡が確認できる地域であり、青森県階上町道仏鹿糠遺跡などで製作工程の資料が確認されている。

岩手県普代村力持遺跡は、敲打技法の未製品出土し、緑色岩の磨製石斧が非常に少ない。一方で、田野畑村和野Ⅰ遺跡では、逆に緑色岩が多いなど、遺跡によって石材の様相が異なる。

⑩⑫地域の太平洋側は、同じ円筒土器文化圏でも⑥⑧⑨地域と比較し、緑色岩の割合が相対的に低いなど、石材構成が異なっているだけでなく、敲打技法の磨製石斧が多い特徴がある（斎藤2012）。

#### カ その他

北海道の④⑤地域では、緑色岩を素材とした未製品や製作工具などが確認されており、生産地の様相が見受けられる。ただ、④地域は原産地でもあり、敲打と擦切技法で緑色岩の磨製石斧が製作されている。円筒土器文化圏の地域性の渡島にあたる⑤地域では擦切技法を主体に緑色岩の磨製石斧が製作されているといった製作技法の地域差がみられる（斎藤2007）。

③地域では神居古潭溪谷付近の滝川市納内3遺跡で、青色片岩と角閃岩製の磨製石斧を製作する遺跡が縄文時代中期に出現する。この地域で製作された磨製石斧が⑥⑧地域あたりまで広がるのが確認されている（註7）。

### （2）大木式土器文化圏（表15～18）

#### ア ⑭地域

【前期】北上山地産と思われる火成岩・堆積岩の石材が用いられ、岩手県北上市滝ノ沢遺跡や奥州市大清水上遺跡でも製作途上の資料も見られる（表15）。また、遠野市綾織新田遺跡（新田Ⅱ遺跡）では蛇紋岩製磨製石斧が出現している。

緑色岩は滝ノ沢遺跡、大清水上遺跡などでは、3割程度と少なく、かつ小形品

が多い上、製作工程を示す資料はない。

【中期】石材傾向はほぼ同じであるが、⑫⑬地域を含め、岩手県北上市横町遺跡、花巻市観音堂遺跡、小瀬川Ⅰ遺跡、一関市清田台遺跡、山田町浜川目沢田Ⅰ遺跡などでは、緑色岩と擦切技法の磨製石斧がわずかに確認されている。

中期後葉の盛岡市繫遺跡で擦切技法と敲打技法の磨製石斧の製作を示す資料が確認されている。製作工具である擦切具は凝灰岩製で、下北地域などで発見されている擦切具とは石材が異なる。盛岡市芋田沢田Ⅳ遺跡などでは擦切痕を持つ蛇紋岩製磨製石斧が確認されている。緑色岩と擦切技法という磨製石斧の石材と製作の関係が崩れていることが確認できた（註8）。また繫同遺跡では希少なヒスイ製の磨製石斧が出土している。

#### イ ⑮地域

【前期】秋田県協和町上ノ山Ⅱ遺跡、にかほ市ヲフキ遺跡など、緑色岩が全体の5割程度をしめている。また、東成瀬村上掬遺跡の緑色岩製大形磨製石斧が確認されており（庄内1999）、北上川流域の⑭地域とは同じ大木式土器文化圏でも様相が異なる。

秋田県湯沢市白館跡では輝石安山岩を主体とした敲打技法の磨製石斧の製作遺跡が確認されているが、基本この地域には、製作遺跡は確認されていない。

【中期】基本緑色岩の割合は低い。また、製作遺跡は確認されていない。

#### ウ その他

大木式土器文化圏である⑯⑰地域の縄文時代前期では、宮城県栗原市嘉倉貝塚、山形県寒河江市高瀬山遺跡、朝日町川内袋遺跡、遊佐町吹浦遺跡で緑色岩がみられ、北上川下流、最上川水系にまで緑色岩が広がるのが確認されている。特に、吹浦遺跡は、円筒下層d式の南限であり、少なくとも当該期においては、このあた

りまでが円筒土器文化圏の影響を受けた地域となる。⑮地域で緑色岩の割合が北上川流域地域よりも比較的高いのは、円筒土器文化圏の影響が強いためと考えられる。

縄文時代中期になると、⑯地域では一関市下館銅屋遺跡、⑰地域の中川原C遺跡のように、緑色岩が少数もしくはみられない遺跡があり、供給はほぼないような状態になる。

### (3) まとめ

#### 1) 縄文時代前期

図7縄文時代前期-1は磨製石斧の原産地と消費地を直接結び付けている。

緑色岩は北海道の日高一帯が産地である。縄文時代前期では、円筒土器文化圏のほぼ全地域に緑色岩が多数占めているが、特に下北から陸奥湾、津軽が多い。一方で、大木式土器文化圏では、太平洋側と日本海側で差はあるが、全体には円筒土器文化圏と比較して少ない。

図7縄文時代前期-1に、生産地を中継させたのが図7縄文時代前期-2である。

緑色岩製磨製石斧は、④地域の原産地では敲打技法で製作し、⑤地域の渡島半島では擦切技法で製作されている。⑥地域、及びわずかに⑧地域で磨製石斧が製作されている。製作技術の点で、⑤⑥⑧地域は、磨製石斧を擦切技法で製作する点で共通する。

それ以外の円筒土器文化圏では、擦切技法の磨製石斧はみられるが、製作遺跡はない。また、敲打技法の緑色岩製磨製石斧は確認できないので、④地域から直接でなく、製品を⑥⑧地域から搬入していたと考えられる。

大木式土器文化圏でも緑色岩は受け入れていたが、同じく敲打技法がないため、⑥⑧地域を経由して手に入れていたと考えられる。

こうしてみると、製作と石材の関係から、⑥⑧地域、特に三内丸山遺跡は、北

海道から搬入される磨製石斧が多数出土するので、物資を集積する拠点の一つとして機能していたと考えられる。

また、太平洋側と日本海側を比較すると、太平洋側は緑色岩の割合が低く、日本海側は高いことから、緑色岩は、北海道から、下北半島、陸奥湾、津軽地域を経由して、日本海側に広く流通していた。一方の太平洋側は、南部地域までは流通し、そこから先は流通量が少なくなることが分かった。その背景は、北上山地産の磨製石斧が流通していたと考えられる。

緑色岩以外では、下北半島の花崗閃緑岩については、⑧地域に資料が多いが、搬出先がどこまで広がるかは不明である。

北上山地については、火成岩・堆積岩を用いた明確な製作遺跡は少ないが、北上川流域の諸遺跡で、製作途上の資料が確認されており、一帯で製作が行われたと推定される。特に北上山地と接する⑩⑫地域は、円筒土器文化圏でも、火成岩・堆積岩系の石材製磨製石斧の割合が高い。

他にも、⑮と⑰地域の間に敲打技法の製作遺跡が確認されているが、搬出先の詳細は不明である。

#### 2) 縄文時代中期

この時期になると、緑色岩の割合が全体に低下するのに合わせて、北上山地の火成岩・堆積岩製や、神居古潭産磨製石斧が流通している。

円筒土器文化圏では、製作遺跡が確認できないことから、原産地と消費地の中間が不明である。ただ、図7縄文時代前期-1と、図7縄文時代中期は類似した流通形態であり、おそらく縄文時代中期においても、陸奥湾沿岸が主要な中継地点であったのではと考えられる。

蛇紋岩は流通範囲が広がる。特に大木式土器文化圏にみられることから供給源は、早池峰山水系と推定される。大木

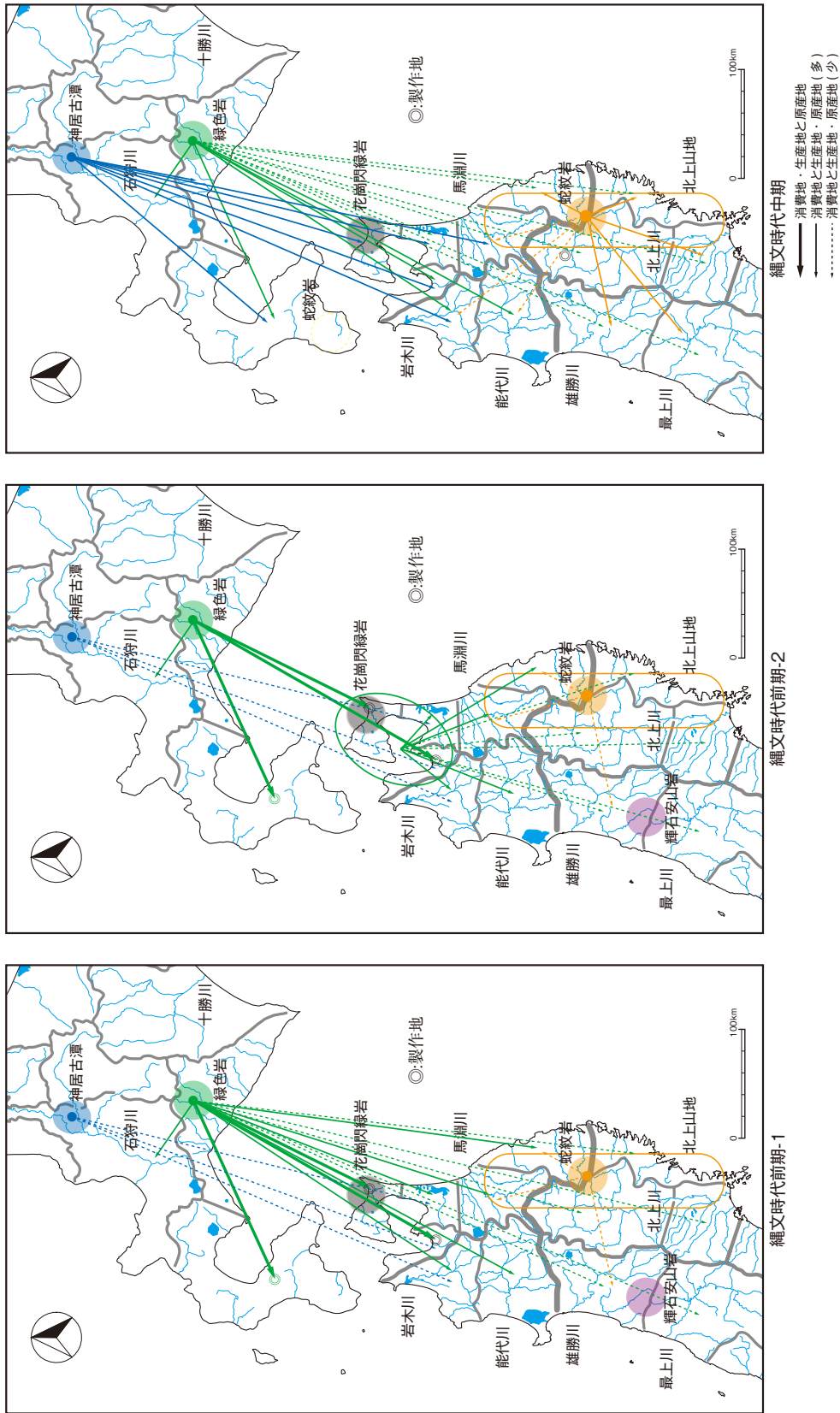


図7 磨製石斧の結節地域



表15 円筒土器文化圏の磨製石斧石材（時期別）

| 地域 | 時期  | 緑色岩 | 神居古潭 | 変成岩 | 硬玉・蛇紋岩 | 花崗閃緑岩 | 火成堆積岩 | 総計  |
|----|-----|-----|------|-----|--------|-------|-------|-----|
| ⑥  | 前期  | 127 | 4    | 5   |        | 33    | 43    | 212 |
|    | 中期  | 21  |      | 1   |        | 7     | 12    | 41  |
|    | 集計  | 148 | 4    | 6   |        | 40    | 55    | 253 |
| ⑦  | 前期  | 41  | 1    | 16  |        | 14    | 33    | 105 |
|    | 中期  | 181 |      | 66  |        | 89    | 98    | 434 |
|    | 集計  | 222 | 1    | 82  |        | 103   | 131   | 539 |
| ⑧  | 前期  | 74  |      | 8   |        | 4     | 18    | 104 |
|    | 中期  | 56  | 3    | 34  |        | 23    | 47    | 163 |
|    | 集計  | 130 | 3    | 42  |        | 27    | 65    | 267 |
| ⑨  | 前期  | 57  | 1    | 3   |        | 1     | 10    | 72  |
|    | 中期  | 80  | 4    | 27  | 3      |       | 26    | 140 |
|    | 集計  | 137 | 5    | 30  | 3      | 1     | 36    | 212 |
| ⑩  | 前期  | 111 |      | 8   | 1      | 3     | 88    | 211 |
|    | 中期  | 49  | 1    | 41  |        | 13    | 130   | 234 |
|    | 集計  | 160 | 1    | 49  | 1      | 16    | 218   | 445 |
| ⑪  | 前期  | 43  |      |     |        | 1     | 6     | 50  |
|    | 中期  | 35  |      |     | 1      | 1     | 38    | 75  |
|    | 集計  | 78  |      |     | 1      | 2     | 44    | 125 |
| ⑫  | 前期  | 13  |      | 2   |        | 6     | 28    | 49  |
|    | 中期  | 15  |      | 5   | 14     | 33    | 105   | 172 |
|    | 集計  | 28  |      | 7   | 14     | 39    | 133   | 221 |
| 総計 | 903 | 14  | 216  | 19  | 228    | 682   | 2062  |     |

表16 大木式土器文化圏の磨製石斧石材（時期別）

| 地域 | 時期  | 緑色岩 | 神居古潭 | 変成岩 | 硬玉・蛇紋岩 | 花崗閃緑岩 | 火成堆積岩 | 総計  |
|----|-----|-----|------|-----|--------|-------|-------|-----|
| ⑭  | 前期  | 73  |      | 17  | 16     | 14    | 121   | 241 |
|    | 中期  | 59  |      | 26  | 44     | 29    | 211   | 369 |
|    | 集計  | 132 |      | 43  | 60     | 43    | 332   | 610 |
| ⑮  | 前期  | 22  |      | 1   | 1      |       | 40    | 64  |
|    | 中期  | 4   |      |     | 4      | 1     | 35    | 44  |
|    | 集計  | 26  |      | 1   | 5      | 1     | 75    | 108 |
| 総計 | 158 |     | 44   | 65  | 44     | 407   | 718   |     |

表19 地域ごとの石材組成（前期）

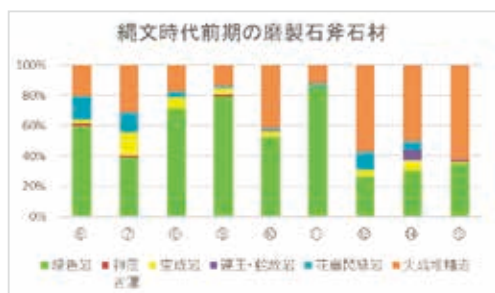


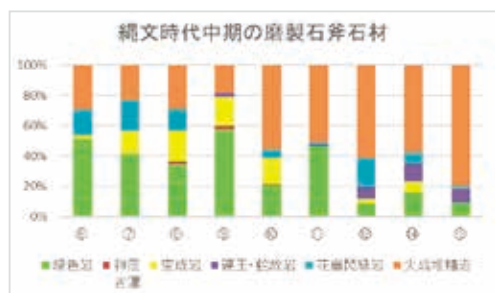
表17 地域ごとの製作工程

| 時期 | 地域 | 1  | 2   | 3  | 4a | 4b | 4c | 4d | 5    | 6    | 7   | a  | b    | 総計   |     |
|----|----|----|-----|----|----|----|----|----|------|------|-----|----|------|------|-----|
| 前期 | ⑥  |    |     | 12 | 11 |    | 2  | 2  |      | 174  | 23  | 7  | 19   | 250  |     |
|    | ⑦  |    |     | 4  | 1  |    |    |    |      | 102  | 2   |    |      | 109  |     |
|    | ⑧  |    |     |    |    |    |    |    |      | 99   | 5   | 2  |      | 106  |     |
|    | ⑨  |    | 1   | 1  |    | 1  |    |    |      | 65   | 6   |    |      | 74   |     |
|    | ⑩  |    |     | 15 | 2  |    |    | 1  |      | 181  | 27  |    |      | 226  |     |
|    | ⑪  |    |     |    |    |    |    |    | 1    | 34   | 15  |    |      | 50   |     |
|    | ⑫  |    |     | 8  | 11 |    |    |    |      | 47   | 2   |    |      | 68   |     |
|    | ⑭  |    | 2   | 25 | 5  | 2  |    | 2  | 2    | 222  | 8   |    |      | 268  |     |
|    | ⑮  | 6  | 8   | 6  | 10 |    | 1  | 1  |      | 47   | 5   |    |      | 84   |     |
|    | 集計 | 6  | 19  | 74 | 29 | 3  | 3  | 6  | 3    | 971  | 93  | 9  | 19   | 1235 |     |
|    | 中期 | ⑥  |     | 1  | 3  |    |    | 1  |      |      | 40  |    | 6    |      | 51  |
|    |    | ⑦  |     |    | 6  |    | 1  |    |      | 1    | 405 | 27 |      |      | 440 |
|    |    | ⑧  |     |    | 2  |    |    |    |      |      | 157 | 6  | 2    |      | 167 |
|    |    | ⑨  |     |    |    | 1  |    |    |      | 2    | 121 | 16 | 1    |      | 141 |
|    |    | ⑩  |     |    | 2  | 5  |    |    |      | 3    | 210 | 14 |      |      | 234 |
| ⑪  |    |    |     |    | 1  |    |    |    |      | 65   | 9   |    |      | 75   |     |
| ⑫  |    |    | 22  | 54 | 18 | 5  | 2  | 1  | 6    | 137  | 3   |    |      | 248  |     |
| ⑭  |    |    | 1   | 14 | 20 | 4  | 7  | 1  | 6    | 302  | 29  |    |      | 384  |     |
| ⑮  |    |    |     |    |    |    |    |    |      | 1    | 39  | 4  |      | 44   |     |
| 集計 |    |    | 24  | 81 | 45 | 10 | 10 | 2  | 19   | 1476 | 108 | 9  | 19   | 1784 |     |
| 総計 | 6  | 43 | 155 | 74 | 13 | 13 | 8  | 22 | 2447 | 201  | 18  | 19 | 3019 |      |     |

表18 地域ごとの製作技術

| 時期 | 地域 | Fl    |     | Pe  | Sa    |       |     | Po   | 総計   |
|----|----|-------|-----|-----|-------|-------|-----|------|------|
|    |    | Pe,Po | Po  | Po  | Fl,Po | Pe,Po | Po  |      |      |
| 前期 | ⑥  | 6     | 19  | 10  | 1     | 2     | 34  | 98   | 170  |
|    | ⑦  | 1     | 2   | 3   |       |       | 16  | 82   | 104  |
|    | ⑧  |       | 4   | 1   |       |       | 22  | 77   | 104  |
|    | ⑨  |       | 9   | 3   | 2     |       | 25  | 32   | 71   |
|    | ⑩  |       | 23  | 17  | 1     | 1     | 40  | 126  | 208  |
|    | ⑪  |       | 6   |     | 1     |       | 16  | 27   | 50   |
|    | ⑫  |       |     |     | 1     |       | 3   | 5    | 9    |
|    | ⑭  | 5     | 42  | 6   |       |       | 16  | 134  | 203  |
|    | ⑮  | 3     | 6   | 4   |       |       | 9   | 15   | 37   |
|    | 集計 |       | 15  | 111 | 45    | 5     | 3   | 181  | 596  |
| 中期 | ⑥  |       | 3   | 5   |       |       | 2   | 30   | 40   |
|    | ⑦  | 9     | 40  | 17  | 1     |       | 6   | 360  | 433  |
|    | ⑧  |       |     | 5   |       | 1     | 9   | 148  | 163  |
|    | ⑨  | 7     | 32  | 12  |       |       | 8   | 80   | 139  |
|    | ⑩  | 1     | 5   | 8   |       |       | 19  | 122  | 155  |
|    | ⑪  | 1     | 8   | 1   |       |       |     | 43   | 53   |
|    | ⑫  | 4     | 13  | 9   |       |       | 3   | 20   | 49   |
|    | ⑭  | 10    | 76  | 21  |       |       | 13  | 216  | 336  |
| ⑮  | 1  | 5     | 6   |     |       |       | 32  | 44   |      |
| 集計 |    | 33    | 182 | 84  | 1     | 1     | 60  | 1051 | 1412 |
| 総計 |    | 48    | 293 | 129 | 6     | 4     | 241 | 1647 | 2368 |

表20 地域ごとの石材組成（中期）



式土器文化圏である盛岡市繫遺跡のように中期後葉に製作遺跡が確認できる場合もあるが、縄文時代前期に確認できた地域では、今のところ製作遺跡は確認できなかった。

### 3) 緑色岩の動向 (図8)

非現地性物資である緑色岩の製作遺跡、石材、製作技術等から、下北半島・陸奥湾沿岸は、北海道渡島半島との関係が強いことが分かった。

日本海側と太平洋側は、緑色岩に差がみられる。津軽は渡島と下北との関係が強く、緑色岩は搬入にたより、それが磨製石斧の組成の大きな割合を占める。磨製石斧の動きも、搬入に頼るため北から南へと一方向の動きである。

太平洋側は、北上山地の関係で南部は岩手県側との関係が強い。古くから敲打技法の磨製石斧の製作が盛んであり、緑色岩はなくとも、影響はない地域であるため、その量も日本海側と比較して少ない。希少性や、人間関係を維持するため

に、緑色岩を入手していたとも考えられる。また、北上山地の磨製石斧が流通しているので、磨製石斧の動きは多方面に向いている。

磨製石斧の流通から地域性をみると、津軽と南部の地域性は、それにかかわる人間関係の親疎も大きく影響していると思われる。縄文時代前期は、まだ大きな差ではなかったが、その関係が積み重なり、次第に地域性はより大きくなったと考えられる。

### さいごに

円筒土器文化圏における磨製石斧の生産と流通に関して地域性の観点から述べた。その成果を要約すると以下のとおりである。

- ・円筒土器文化圏内では、前期と中期とで石材の割合が異なる。前期では緑色岩が多く、中期では減少し、別の石材が増える。
- ・同時期でも、各地域で石材、製作遺跡の差がある。下北・陸奥湾から日本海側にかけて緑色岩は多く、太平洋側は比較的少ない。
- ・円筒土器文化圏と大木式土器文化圏とでは磨製石斧の石材構成の割合が異なる。
- ・大木式土器文化圏でも日本海側と太平洋側では異なる。
- ・円筒土器文化圏の日本海側は渡島・下北・津軽とつながり、南部地域は岩手県側との関係が強い。

各地域における磨製石斧の動向は、石材と製作技術に差がある。円筒土器文化圏における地域性ごとに、特に非現地性物資である緑色岩製磨製石斧は、その傾向が著しい。

分析の結果、下北半島・陸奥湾沿岸の⑥⑧地域は、緑色岩製磨製石斧を東北地方各地に搬出する経由地として機能していたと考えられる。特に三内丸山遺跡は

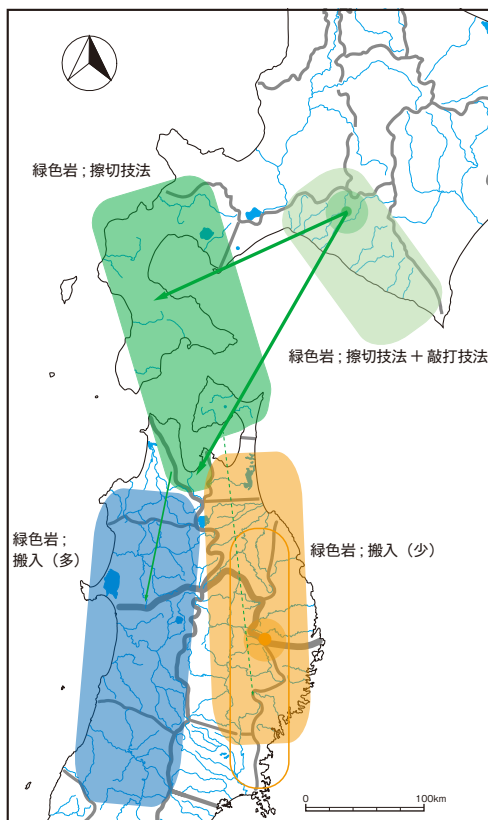


図8 緑色岩製磨製石斧の地域性

物資が集中することから、交易センターのような役割を果たしていた可能性も否定できない。

以上のことをより実証的に明らかにするには、緑色岩以外の石材の、原産地・生産地・消費地の関係を明らかにすることである。

また、磨製石斧以外の、黒曜石、アスファルト、ヒスイなど、広域に流通する多くの遺物のデータから流通範囲等を明らかにする必要がある。

今後、他のデータを組み合わせていくことで、三内丸山遺跡はじめ、円筒土器文化圏の交易及び、地域性がより具体的になるであろう。

#### 謝辞

執筆の機会を与えてくれた、東北地質調査業協会及び、以下の関係機関にお世話になった。三内丸山遺跡センター、青森県埋蔵文化財調査センター、青森県立郷土館、岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、秋田県埋蔵文化財センター、八戸市教育委員会、むつ市教育委員会、三沢市教育委員会、青森市教育委員会、つがる市教育委員会、盛岡市教育委員会、北上市教育委員会、花巻市教育委員会、奥州市教育委員会、一関市教育委員会、鹿角市教育委員会、宮城県教育委員会、末筆ですが感謝します

#### 註

註1 アイヌ民謡では、オキクルミ サマインクルの2柱の神が、6本の斧で船を作り、交易へ繰り出す話がある。『今昔物語』の土佐国における兄妹の開墾の話でも何種類もの斧を携えて出発する話があるように、斧は生活必需品である。場合には、贈答物、財産としての価値も有していた(佐原1994)。

註2 磨製石斧の石材鑑定は、基本的に非破壊による肉眼鑑定であり、鑑定者に左右されることも大きい。ただ、これまで同定された石器の一部について、岩石標本を作製し、再鑑定された資料がある(杉野森2014、柴・諸星2015)。ただ、学術的な石材名と縄文人の石材の分類が一致しているとは限らないので、あまり詳細に石材名を分類しても、当時の分類に近づける保証はない。

註3 擦切技法自体は、磨製石斧以外にも、珧状耳飾などの石製品にも用いられている。

註4 有段としたものの中には定角式に近いものもある。

註5 アイヌ社会では、水系と分水嶺単位で、乙名と呼ばれる首長に分かれており、地位区分の参考とした。

註6 円筒土器文化以前の縄文時代草創期・早期における磨製石斧の動向は以下のとおりである。

草創期では、青森県八戸市櫛引遺跡や階上町滝端遺跡で、緑色岩(縞模様でない)製磨製石斧が出土している。ただ、擦切技法は用いられていない。

早期から前期前葉では、北海道函館市中野B遺跡、芦別市滝里遺跡群等で蛇紋岩製磨製石斧の擦切技法による製作遺跡が出現する。青森県でも緑色岩製磨製石斧が主に下北地域・上北地域で見られる。東通村下田代納屋B遺跡(吹切沢式)で擦切技法を持つ有孔磨製石斧出土し、類例は中野B遺跡にある。青森県三八地域では、早期中葉から敲打整形の磨製石斧が出現する。

早期後葉では、緑色岩製磨製石斧や、在地産の敲打成形の磨製石斧が多く確認される。三八地域では工程の第3・4段階の資料が増加する。また、日本海側にも緑色岩製磨製石斧が広がる。

磨製石斧の地域性は早期から生じていたと思われる。

註7 ①②地域は、白滝・置戸など黒曜石の産地であり、この地域の黒曜石が縄文時代中期に北東北地域へもたらされた。

註8 縄文時代後期及び晩期では、盛岡市川目A遺跡(須原2013)や手代森遺跡、宮城県気仙沼市田柄貝塚で磨製石斧の製作遺跡が確認されている。緑色岩の割合は低い状況は中期の延長である。磨製石斧の埋納遺構は後期初頭からみられる(小田内沼遺跡、笹子遺跡、館野遺跡、高屋館遺跡、秋大農場南遺跡など)。

#### 参考文献

- 伊藤幹治1995『贈与交換の人類学』筑摩書房  
伊藤幹治1996「贈与交換の今日的課題」『贈与と市場の社会学』岩波書店 1-31頁  
小笠原好彦1974「円筒式文化の崩壊とその意義」『東北の考古・歴史論集』55-77頁  
柄谷行人2010『トランスクリティーク』岩波現代文庫/学術233  
柄谷行人2015『世界史の構造』岩波現代文庫/学術323  
柄谷行人2020『哲学の起源』岩波現代文庫/学術413  
合地信生2004「三内丸山遺跡出土磨製石斧の産地について」『特別史跡三内丸山遺跡年報』7 16-20頁  
合地信生2006「三内丸山遺跡出土石斧の産地と流通について」『特別史跡三内丸山遺跡年報』9 56-61頁  
合地信生2009「石斧製作石材(原石・擦り石・石刀)の円筒土器文化圏における流通」『特別史跡三内丸山遺跡年報』12 53-60頁  
齋藤岳2002「青森県における石器石材の研究について」『青森県考古学』第13号 63-81頁

- 齋藤岳 2003 「蛇紋岩製磨製石斧の製作と流通-渡島半島と本州北端の間で-」『北海道考古学』第39輯 17-28頁
- 齋藤岳 2004 「三内丸山遺跡の磨製石斧について」『特別史跡三内丸山遺跡年報』7 21-39頁
- 齋藤岳 2006 「三内丸山遺跡の磨製石斧の全体像の解明に向けて」『特別史跡三内丸山遺跡年報』9 36-47頁
- 齋藤岳 2007 「津軽海峡を越えたアオトラ石」～青森県三内丸山遺跡の研究報告から～』『沙流川歴史館年報』第8号 27-43頁
- 齋藤岳 2012 「本州北東端の磨製石斧製作-三陸の石材環境への適応と石斧製作の解明にむけて-」『青森県埋蔵文化財調査センター 研究紀要』第19号 19-30頁
- 佐原真 1994 『UP考古学選書6 斧の文化史』東京大学出版会
- サーリンズ, M.D. (山内昶訳) 1984 『石器時代の経済学』財団法人法政大学出版局
- 柴正敏・諸星哲也 2015 「青森県埋蔵文化財調査センターにおける石材標本作成の意義」『青森県埋蔵文化財調査センター 研究紀要』第20号 1-16頁
- 庄内昭男 1999 「東成瀬村上掬遺跡における大型磨製石斧の発見状況」『秋田県立博物館研究報告』第24号 61-68頁
- 杉野森淳子 2014 「青森県埋蔵文化財調査センターにおける石材標本作製」『青森県埋蔵文化財調査センター 研究紀要』第19号 1-20頁
- 須原拓 2013 「川目A遺跡出土の磨製石斧にみる石斧生産について」『紀要』XXXII 59-68頁(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 高橋哲 2016 「磨製石斧の生産と流通」『一般社団法人日本考古学協会2016年度弘前大会 第1分科会 津軽海峡圏の縄文文化研究報告資料集』日本考古学協会2016年度弘前大会実行委員会 57-110頁
- 高橋哲 2018 「円筒土器文化における磨製石斧の考察-三内丸山遺跡と水上(2)遺跡出土の磨製石斧の比較を通して-」『特別史跡三内丸山遺跡年報』21 青森県教育委員会 32-42頁
- 手塚章 1991 「地域的観点と地域構造」『地理学講座4 地域と景観』古今書院 107-184頁
- 西田正規 1986 『定住革命-遊動と定住の人類史』新曜社
- 林謙作 2004 『縄文時代史I』雄山閣
- 前川寛和 2007 「三内丸山遺跡出土の磨製石斧の岩石学的特徴と石材産地特定の可能性について」『特別史跡三内丸山遺跡年報』10 15-27頁
- モース, M. (有地亨、伊藤昌司、山口俊夫 共訳) 1973 「第二部 贈与論」『社会学と人類学』I 弘文堂 219-400頁
- 八幡一郎 1938a 「先史時代の交易(上)」『人類学・先史学講座』第2巻 1-28頁
- 八幡一郎 1938b 「先史時代の交易(中)」『人類学・先史学講座』第3巻 29-58頁
- 八幡一郎 1938c 「先史時代の交易(下)」『人類学・先史学講座』第5巻 59-73頁